HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	北海学園大学人文学部 2023年度 優秀卒業研究賞
著者	
引用	北海学園大学人文論集(77)：1-16
発行日	2024-08-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

北海学園大学人文学部
2023年度 優秀卒業研究賞

講　　評

人文学部長　小　松　かおり

今年の優秀作品も力作揃いで読み応えがありました。

最優秀賞を獲得した山下栞さん（森川ゼミ）の「シェイクスピア作品における異人についての一考察 ── ムーア人は誇り高く，ユダヤ人は狡猾なのか ──」は，どちらもヴェネツィアを舞台としたシェイクスピアの『ヴェニスの商人』と『オセロー』を取り上げ，両作品の中で「異人」という役割を負わされたユダヤ人シャイロックとムーア人オセローの描かれた方を検討した論文です。本作品はシェイクスピア作品分析の先行研究に加えて，ふたつの作品の「種本」を分析し，種本と比較することで，シェイクスピアの含意を説得力を持って考察しました。また，当時のイングランドの社会状況の中で，ムーア人（アフリカ系）とユダヤ人に対する社会の視線の違いを検討し，シェイクスピア自身のイングランドの中でのカトリック的育ちというマイノリティ性を考慮するなど，複数の視点から，説得的な「異人」論を展開しました。シェイクスピアに関しては，反差別の文脈から言及されることがありますが，16世紀末の演劇界の状況も鑑みつつ，慎重にその評価を再検討しています。対象に対する深い興味,「異人」という問いの立て方，先行研究の用い方，読み物としての完成度の高さなど，どれをとっても非常にレベルの高い研究だと審査員の意見が一致しました。

言語分野からは，優秀賞として，南出明日香さん（徳永ゼミ）の「和歌における『霞』の意味と用法 ──『万葉集』・『古今和歌集』・『新古今和歌集』

を資料として ──」が選ばれました。日本の古典韻文の代表である3つの作品を対象として「霞」の意味用法を分析し，時代ごとの使われ方の変化と連続性を分析した論文です。「霞」をテーマとして取り上げた4つの先行研究を整理したのち，「霞」の全体像について自身でひとつひとつの句を読み解きました。その上で，霞を「人事」「自然」「比喩」「言語」という4つの用法に分類して，歌集ごとの用法の変化を数で示すなど，分析の工夫がみられました。この論文は，A4で65ページに及ぶ大部の論文であり，ひとつひとつの歌を丁寧に分析した粘り強さが印象に残りました。3つの作品における「霞」の多機能性を明らかにしたこの作品は，さまざまな方面への広がりが感じられ，今後の展開が楽しみです。

思想分野からは，阿久津遙さん（小柳ゼミ）の「アイルランドにおける文化的アイデンティティ ──『カトリック×土着文化』の構築過程の分析 ──」が選ばれました。ケルト性とカトリック性が混淆したアイルランドという地の文化的アイデンティティを歴史的に解き明かす論文です。アイルランドの文化的背景を，ケルト人がアイルランドにやってきた西暦250年頃から歴史的に解説した上で，5世紀にキリスト教を布教した聖パトリックの象徴性，ケルトデザイン，妖精信仰という要素から現代のアイルランド文化を分析しました。特定の土地の文化的なアイデンティティの解明は，現代の国民国家論の中で重要なテーマのひとつで，これに真正面から取り組んだ意欲的な作品です。複雑な歴史を複数の文献を使いながら手際よくまとめ，読み応えのある論文になりました。

歴史分野から選出された飯塚美月さん（片岡ゼミ）の「近衛前久は石谷親子と親しかったのか ── 天正11年2月20日付前久書状における尚々書（なおなおがき）の仮名交じり表記について ──」は，本能寺の変の黒幕は誰か，という歴史ミステリーをめぐる論文です。四国の長宗我部元親が黒幕だったという「四国説」の根拠として，近年公開された「石谷家文書」が注目されており，この論文では，その中から，織田信長と近しかった近衛前久が長宗我部元親の家臣である石谷光政・頼辰に送った書状を資料として，彼らの関係性を書簡の本文と尚々書（追伸）の表記体から読み解き

ました。状況の異なる複数の書状の比較と人物相関図から前久の書き方の癖を探り,「仮名交じりの尚々書から親しさを読み取る」という先行研究に疑問を呈していることに説得力があるとともに，謎解き風の展開が読み物としてもおもしろい論文でした。無駄をそぎ落とした引き締まった作品であることも印象的でした。

環境分野から選出された，松田風音さん（小松ゼミ）の「中小地場食品小売店だからこそできること ──『くいしんぼうのやおや』を事例として ──」は，人びとの食や農への意識が希薄化している現在，中小の地場食品小売店が果たす役割について検討した論文です。札幌市内の八百屋と地場のスーパーを対象に，中小の地場の食料品店が生産者と消費者をつなげるだけでなく，消費者どうしのコミュニティを作ったり，農業従事者を増やしたり，食品ロスを削減するなどさまざまな役割を担っていることを示しました。フィールドワークを中心とした論文で，店内の観察と店主のインタビューの記載が丁寧であることに加え，先行研究でしっかりと問題点を整理し，フィールドワーク結果を位置づけていること，ふたつの対象を比較したことで分析が説得力を増したことなどが評価されました。

英語で執筆した論文の中からは，大島壮史さん（森川ゼミ）の “A Study on Alfred Hitchcock’s Film Techniques: The Art of Manipulating the Minds of Audiences” が選ばれました。ヒッチコックが，自身の幼少の体験から得た不安と恐怖の原体験をどのように映画に反映させているか，また，どのように不安や恐怖を生み出すかを，プロットとカメラワーク，演出から分析した論文です。この論文は,「英語論文」から選ばれましたが，映画論として質が高いと評価されました。膨大なヒッチコック作品の「不安」と「恐怖」の場面をひとつひとつ綿密に分析したことによる説得力と，それを独自の視点で整理しようとした点, また, 大部の論文を英語で書こうと思った意欲がすばらしいです。

よい卒業研究とは何か，と考えると，まずは，自分が興味をもつ対象について，深く，または広く知りたいという情熱の熱量が表現されていることだと考えます。今年の優秀卒業研究賞受賞作には，この熱量を感じまし

た。4 年間で身につけた知識と技術と問題意識で，自分が興味を持つ対象に没入する感覚は,「研究」の醍醐味です。そして，その対象をどのように攻略しようと考えること，言い換えれば，自分で問いを立てることが必要です。その上で，対象に対する情熱だけでなく，事実関係や先行研究について丁寧に調べ, 自分が見たものを客観的に位置づけなくてはなりません。そして，最後に，自分が見た・調べた・考えたことのおもしろさを人と共有するためには，構成と文章という表現力が必要です。

人文学部で学ぶことには，多くの学問分野が関わっており，学問分野ごとの視点や手法，重視する点は違いますが,「人間を知る」という目標は共有しています。毎年，この目標に向かって一歩一歩進むようすを刻んだ卒業研究を卒業生の数だけ読めるのは，教員としてのこの上ない喜びです。卒業生のみなさんが，この経験を生かして，自分が大切だと考えることについて,「自分で問いを立て」「丁寧に調べ」「人に伝えらる形にし」て，他者と対話を重ねられる人になってほしいと願っています。

最優秀賞（要旨）

言語文化群（文学）

シェイクスピア作品における異人についての一考察
── ムーア人は誇り高く，ユダヤ人は狡猾なのか ──

山下栞（1 部英米文化学科　指導教員：森川慎也）

シェイクスピア作品の多くは，文学的・文化的価値のみならず，現代社会にも通ずる普遍的な問題を孕んでいる。『ロミオとジュリエット』や『夏の夜の夢』などで取り上げられた家父長制と恋愛結婚との対立や,『十二夜』などに見られるジェンダー問題など，近年の自由主義や人権問題に類するテーマをもったシェイクスピア作品は少なくない。その中でも，人種に関する問題が色濃く反映された作品として,『オセロー』と『ヴェニスの商人』が挙げられる。この 2 作品はどちらもイタリアのヴェニスを舞台としており，前者ではムーア人と呼ばれる黒人が，後者ではユダヤ人の高利貸しが，それぞれ日常的に人種による差別を受ける人物として登場する。しかし，ユダヤ人のシャイロックが悪意をもってカトリック教徒の命を脅かす狡猾で悪辣な人物としてえがかれているのに対し, ムーア人の将軍オセローは，白人の旗手イアーゴーの悪意によって身を滅ぼす悲劇の主人公として描写されている。

本論文では，何世紀にも渡り愛され続けるシェイクスピア作品の時代を超えた魅力を再確認するとともに，シェイクスピアの視点を通して現代社会を生きる我々のあるべき姿勢についてひとつの見解を示すことを目的として，シェイクスピア作品の膨大な登場人物の中でもオセローとシャイロックに焦点を当て，別々の作品で同様のテーマを持ちながら対照的にえがかれた 2 人の人物を比較し，そのえがかれ方に差異が生じた要因について論じた。

第 1 章では，まず,『オセロー』と『ヴェニスの商人』をそれぞれの種本と簡単に比較し，全体を通してオセローは種本のムーア人から大きく改変

され，悪役的な描写から遠ざけられ高潔な人物へと変貌を遂げているのに対し，シャイロックの描写は種本のユダヤ人からの変化がそれほど多くないという点を指摘した。また，シェイクスピアの先行作品『タイタス・アンドロニカス』に登場するムーア人アーロンがオセローとは正反対の悪人としてえがかれている点や，同年代の劇作家クリストファー・マーロウの『マルタ島のユダヤ人』に登場するユダヤ人バラバスのシャイロックとの関連性や違い，およびそれぞれの作品の執筆順がオセローやシャイロックの描写にもたらした影響を分析した。また，シェイクスピア自身が当時のイングランドで宗教的マイノリティに当たるカトリックと密接に関わっていたことについても触れ，そういった人生経験が彼の劇中に登場する異人に対する同情的な一面のひとつの要因になっている可能性を示した。

第2章では，シェイクスピア時代の英国における黒人とユダヤ人それぞれの状況を比較した。当時の創作世界において黒人は常に「極悪非道な悪役」とされていたこと，ユダヤ人は「悪徳高利貸し」として金利をタブー視するキリスト教徒らから忌み嫌われていたことなどシェイクスピアの時代に広く蔓延していた差別的な価値観を踏まえた上で，『オセロー』執筆直前期にムーア人大使率いるモロッコ使節団がロンドンに滞在したこと，『ヴェニスの商人』を手がける頃にポルトガル系ユダヤ人ロデリゴ・ロペスがエリザベス女王暗殺を計画したとして処刑されたことなどの特徴的な歴史的事実が各作品の構成に影響を与えているであろうと論じた。その上で，シェイクスピアが必ずしも当時の世論や一般的な価値観に従順に作品を執筆したわけではなく，シャイロックの有名な「ユダヤ人には目がないのか？」というセリフに代表されるような，人々の固定観念を覆しうるような描写を意図的に盛り込んでいることを明らかにした。そこで，先行研究の引用から，シェイクスピアは人種や信仰を超えて「人間は人間だ」という視点を持って作品を執筆していたのではないかと結論づけた。

第3章では，実際に物語の中でオセローとシャイロックが犯した罪とその重さを比較した。ここでは，あくまで法に則った殺人を試みて失敗に終わったシャイロックより，自身の配偶者を直接殺害したオセローの方がよ

り罪が重いであろうとした上で，作中世界における法や慣習を考慮すると必ずしもそうとは限らないといった点も指摘した。これを踏まえ，シェイクスピアが彼らに与えた結末についても比較し，改宗を条件とする「特赦」を受け入れて尊厳と引き換えに命や財産の多くを見逃されたシャイロックに対して，妻殺しを犯したオセローは，登場人物と観客の両方に「誇り高き将軍」としての役割を認めさせるためには己の罪を認めて潔く自害して見せるほかなかったのではないかと論じた。また，前章までの内容も踏まえ，シャイロックが「ユダヤ教徒の高利貸し」であることが作中人物と当時の観客の双方に与えるマイナスの印象と，「キリスト教に改宗したヴェニスの将軍」であるオセローの作品公開当時の価値観に照らし合わせた宗教的・職業的な潔白さについて指摘し，それに伴う作中人物らの行動の違いによってオセローとシャイロックの対照的な人物像が浮き彫りになることを示した。一方で，２人のキャラクターが他者を加害するような行動に至った外的要因について，オセローが狡猾な白人の部下イアーゴーに逆恨みで妻の殺害へと追い込まれたこと，シャイロックはアントーニオらから日常的な差別を受け，娘も強盗同然に彼の財産や貴重品を奪って駆け落ちしてしまったことなどを述べ，彼らが加害者である前に被害者としての側面を持っていたという点についても論じた。

最後に，各章の内容を簡単に振り返ったのち，16〜7 世紀の英国を生きた文豪シェイクスピアを単純に反差別，現代人権思想の先駆者であるとは言い難いとした上で，多種多様な「他者」と密接に関わる多文化社会を生きる現代の我々に対し，彼は作品を通して多様性を受け入れるための第一歩を示してくれているのではないかとの見解を述べて締めくくった。

優秀賞

言語分野

和歌における「霞」の意味と用法

――『万葉集』・『古今和歌集』・『新古今和歌集』を資料として――

南出明日香（1部日本文化学科　指導教員：徳永良次）

本稿は，『万葉集』・『古今和歌集』・『新古今和歌集』の3作における「霞(かすみ)」の意味・用法を独自に分類した上で検証し，和歌に使用される「霞」がどのような意味を持ち，どのような状況で，どのような目的で使用されているのか，歌集相互の共通点と相違点を明らかにしていくものである。

第1章は，「霞」を含む語の定義を辞書類から整理しつつ，3作の時代，歌数，配列，和歌の役割が，私的な日常生活から観念的傾向へと変化していることを確認した。

第2章は，「霞」や歌枕についての先行研究を検討した。その結果，先行研究には，3作の共通と相違が明確には述べられていないこと，特に，『万葉集』と『新古今和歌集』の相違については，全く検討されていないことを指摘した。

第3章は，実際に『万葉集』・『古今和歌集』・『新古今和歌集』の順に，「霞（かすみ)」の全用例を抜きだし，「人事・自然・比喩・言語」のカテゴリーを独自に設定し，「霞」と共に用いられる景物や名詞類も合わせて一覧させた上で，1つずつ検証していった。

第4章は，前章で分類した内容を考察し，「霞」と共に用いられる景物や名詞がどのような場面で使用され，「霞」と同時に用いられる理由を明らかにした。さらに，3作を4つのカテゴリーに分類し数や割合を明確化しつつ詳細に検討した。その結果，3作それぞれの独自の用法や相違，「霞」が歌の情景や心情を代言したり歌の意図に沿って変容することを解明した。また，先行研究の考察の誤りを指摘し，未記載であった用法や「霞」以外の景物も発見することができた。

最後に，共通点と相違点を明確化すべく，「霞（かすみ）」と共に用いられる景物や名詞」・「万葉集の霞」・「古今和歌集の霞」・「新古今和歌集の霞」・「万葉と古今の共通と相違」・「古今と新古今の共通と相違」・「万葉と新古今の共通と相違」・「３作の共通と相違」の順に整理した。

結論として，春の景物として「霞」を用いるといった継承，『万葉集』と『新古今和歌集』は障害の代替として用いるが『古今和歌集』は用いないなどの断絶，視界を妨げて歌の主部に注目させる物象から心情把握の補助，統括的な描写の一部へと遷移が起きた理由を記述した。しかし，本稿は３作のみの検証にとどまった弱点が残るので，近世や近代の作品で用いられる「霞」や「霞」と同等な機能を持っていた景物については今後の課題とした。

思想分野

アイルランドにおける文化的アイデンティティ
――「カトリック×土着文化」の構築過程の分析――

阿久津遥（１部英米文化学科　指導教員：小柳敦史）

本稿では，「カトリック×土着文化」のアイデンティティを持つアイルランドを取り上げ，異なる文化が出会い変容を重ね，文化的アイデンティティを構築していくことについて理解を深めた。具体的にはケルト的要素の強い土着文化の時代から，キリスト教カトリックの流入とプロテスタント国家である英国の支配を経て，独立に至るまでのアイルランドの歴史をまとめ，文化形成の過程を読み解いた。

第１章では，アイルランドに古くから根付いているケルト的要素の強い土着文化，特に信仰に焦点を当てその様相をまとめた。キリスト教化が進められる以前のアイルランドでは，氏族制社会や自然崇拝を基盤にした文化が根付いており，また自然崇拝から拡大して形成された，神話や妖精信仰，異界信仰などの独特な信仰を有していたことが分かった。

第２章では，キリスト教流入以降のアイルランドの歴史をまとめ，現代

アイルランド文化が形成されるまでの歴史的背景を概観した。アイルランドでは431年にキリスト教宣教が始まり，次第に氏族制社会に適応する修道院制が拡大した。また中世以降は，ゲール人同士，対ヴァイキング，対ノルマン人，対プロテスタント，対英国などの争いを繰り返し，アイルランドのカトリック信者は多くの支配を受けた。しかし彼らは自分たちの権利のために立ち上がり，最終的にアイルランド自由国として独立を果たしたという歴史があることを確認できた。

第3章では，キリスト教宣教時に活躍した聖パトリックに焦点を当て，歴史を通して語られてきた聖パトリック像がアイルランドの文化形成にどのような影響を与えたのかについてまとめた。そうして聖パトリックという存在が，宣教時代には後継者の宣教推進の支えに，英国支配下の時代にはカトリック信仰維持の支えに，そして独立時には独立推進の精神的支えになっていたことが分かった。

第4章では，アイルランドが「カトリック×土着文化」というアイデンティティを持つに至った要因を「カトリック解放令」と文芸復興に求め，独立との関連性を考察した。「カトリック解放令」の経験から得たカトリックとしての団結力と，アイルランドにおけるカトリックの重要性への自覚から，カトリックはアイルランドの宗教的アイデンティティとなった。また同時期に起こった文芸復興によって英国との差異を明確にしたことで，ナショナリズムを促進し，その後の独立戦争を推し進めたことが考察できた。

そして第5章では，それまでの章で確認した文化形成の過程を基に，現代アイルランドの文化的アイデンティティを構成する要素について理解を深めた。本章では聖パトリックの存在意義，デザイン分野，妖精信仰など，「カトリック×土着文化」の固有性が顕著に感じられる3つを代表例として取り上げた。そして最終的に自然崇拝や異界信仰などを起点とする想像力豊かな土着文化固有の感性が，歴史を経てカトリックと融合し，現代アイルランド文化の独自性を育んできたことを確認した。

以上のようにしてアイルランドで起きた文化の統合・分離の歴史から，

文化的アイデンティティの両面性を見出した。それは第一に，文化的アイデンティティがあらゆる文化との統合（自文化を保持しつつ，異文化も受け入れる状態のこと）によって徐々に構築されていくということ。一方で文化的アイデンティティがある文化との分離（異文化を受け入れることに消極的で，自文化を保持する状態のこと）を保つ抵抗力にもなり得るということである。さまざまな文化が出会う現代社会において，この文化的アイデンティティの両面性への理解はより一層重要視されるだろう。

歴史分野

近衛前久は石谷親子と親しかったか
── 天正 11 年 2 月 20 日付近衛前久書状における尚々書の仮名交じり表記について ──

飯塚美月（1 部日本文化学科　指導教員：片岡耕平）

本稿では，元関白の近衛前久が天正 11（1583）年 2 月 20 日付で送った書状について，その本文と尚々書で明らかに仮名の使用頻度が異なっていることに着目し，その理由を考えた。本書状は，当時長宗我部元親の家臣であった石谷光政と，その養子で斎藤利三の実兄でもある頼辰に宛てられたものである。前久は同日付で島津義久・義弘兄弟と，北郷時久にも書状を送っていて，上記の特徴を持つのは 4 通のうち石谷親子に宛てたもののみである。これと併せて，内池英樹氏の，同日付の書状を受け取った他の 3 人よりも，石谷親子が前久と親しかったという説について，永禄から天正にかけて前久が送った書状を比較しながら検証した。

2 章では本稿の前提として，石谷親子宛書状における本文と尚々書，漢字表記で書かれた別の前久書状をそれぞれ比較し，明らかに仮名の出現頻度が異なっていることを確認した。また，本書状の尚々書には，途中から仮名が増えるという特徴があることも分かった。

3 章では，前久の書状における尚々書についていくつか例を挙げ，前久が本文と尚々書を異なる表記体で記した例は少なく，そこには何か理由が

あったはずであることを確認した。

4章では，前久が仮名交じり表記体で記した書状をいくつか例に挙げ，それが通説のとおり相手と親しい場合か，個人的あるいは非公式な文章を書く場合のことであること，全く別の意図を持って仮名交じり表記文を書いた例もあることを確認した。

5章では，辞書と系図，前久書状を用いながら，石谷親子，島津兄弟，北郷時久の5人について，その立場と前久との関係について考えた。前久は石谷親子と直接やり取りをしていた可能性があり，島津家とは家ぐるみの付き合いがあったと分かった。時久に関しては，島津家の中でも近衛家との交流に関わる重要な役目を担っていたと考えた。

6章では，時久宛書状と石谷親子宛書状を，書札礼における宛名の表記に着目して比較した。結果として，親子宛の天正11年2月20日付書状は時久宛のものと比較して明らかに丁寧に書かれていることが分かった。

7章では，諸将宛に送られた前久書状を見ていくと，親しい相手にこそ厚礼の書状を送っていたことが分かった。そして，それと彼らの立場とを踏まえて，現存する同日付書状4通を受け取った5人のうち，前久が本当に親しくしていたのは島津義久であると考えた。

以上のことから，『石谷家文書』における近衛先久書状の本文と尚々書における表記体の違いは，親しかったからではなく偶発的なものであると結論づけた。逼迫した状況の中で，彼は味方となる相手を武家に求めた。石谷親子宛書状における尚々書はあくまで元親と助力の約束を取り付けるための手段のひとつであり，尚々書を書き始めた時に彼の頭の中にあったのは，「自分は必死に元親の立場を守ろうとしていたのだ」と伝える意図のみであったと考える。また，石谷親子に丁寧な書状を送ったのは，前久が彼らを「長宗我部元親の一家臣」ではなく，「将軍義輝の元側近」として見ていたからだと考える。

環境分野

中小地場食品小売店だからこそできること
──「くいしんぼうのやおや」を事例として ──

松田風音（2 部英米文化学科　指導教員：小松かおり）

現在における食と農の問題の一つに，人々の食や農への意識が希薄化していることがあげられる。具体的な例としては，旬について，食材そのものに対する興味関心，自身の地域における地場農産物や農業そのものに対する理解などがあり，これらに注目する機会が減っていると考えられる。これらは食環境の変化や食と農の距離が拡大したことによって引き起こされ, 食と農に様々な悪影響を及ぼしている。そのため,「食と人をつなげる」ということが重要であるが，現代の食品小売店では利便性や効率を重視するあまり，食と人のつながりは希薄化する一方であり，食と農の問題も加速してしまっている。同時に，本来持っていた食品小売店の「食を通したコミュニティの場」「生産者と消費者の仲介者」としての役割は薄れてしまい,「食と人のつながり」だけでなく,「食を通した人同士のつながり」も希薄化してしまい，食と農に大きな影響を与えている。このような問題に対し，大きなチェーン展開はせず，特定の地域に 1～20 数店舗の中小規模で経営する食品小売店，つまり「中小地場食品小売店」が食と農に良い効果をもたらすのではないかと考えた。そこで本論文では，青果専門店である「くいしんぼうのやおや（以下「やおや」)」を調査し，2022 年に調査した「フーズバラエティすぎはら（以下「すぎはら」)」の事例も踏まえ,「中小地場食品小売店」だからこそできることについて検討した。

2 章では，調査方法と調査対象である「やおや」について述べた。

3 章では，インタビュー結果から,「やおや」の重視する点を 3 点にまとめ，具体的な取り組みを述べた。「やおや」では，食を通して人と人をつなげることや，農業従事者不足への対策，安心安全で新鮮な野菜の提供と食品ロスの削減を重視し，多種多様な取り組みを行なっていたことがわかった。

4章・5章では，調査結果を踏まえ，「やおや」の役割を述べた。「やおや」には，人々が疎かにしがちである食への意識を回復させ，「人と食のつながり」を強める役割があった。また，「食のコミュニティの場」「生産者と消費者の仲介者」として機能することで，人と人をつなげることができるとわかった。このように，現代の食と農の問題を解消する役割があり，それに付随してさまざまな効果も見受けられた。

最後に6章では，「中小地場食品小売店」に該当する「やおや」，「すぎはら」と，スーパー・コンビニ・宅配事業の3業態を比べることで，「中小地場」であるからこそできることを検討した。「やおや」や「すぎはら」のように，中小規模であることを活かし，地域に根付いた独自の取り組みを行うことで，他業態にはできない役割を担うことができ，食と農の問題に対応することができる。ここに「中小地場食品小売店」の有用性が見受けられると筆者は考えた。

英語論文

A Study on Alfred Hitchcock's Film Techniques: The Art of Manipulating the Minds of Audiences

大島壮史（1部英米文化学科　指導教員：森川慎也）

Alfred Hitchcock (1899 – 1980) is one of the most influential filmmakers in the history of cinema. He was born in England and began his career as a filmmaker in the British film industry, producing films primarily in suspense, thriller, and horror genres in both the United Kingdom and the United States of America. His films have a strong connection to his own memories, experiences, and sensibilities. This is evident in his statement "The only way to get rid of my fears is to make films about them." (Alfred Hitchcock.com, n.d.). If so, it should be helpful to study his film techniques if I first analyze his experiences and from there explore elements he based his filmmaking on. Therefore, the starting point of this study is an analysis

of Hitchcock's experiences and sensibilities. From there, I further analyzed Hitchcock films in terms of plot, camerawork, and direction to discuss how he controlled the audience's mind.

Over several decades, a considerable number of studies have been conducted on Hitchcock's films. However, while much research has been conducted, there are some problems. One is that the actual relationship between Hitchcock's experiences and his filmmaking is not examined enough. In addition, there is a tendency for Hitchcock studies to not sufficiently discuss multiple films in relation to each other. Therefore, it is difficult to examine Hitchcock's techniques throughout his career, and the connections between different works are not deeply explored. Taking the above two problems into consideration, this thesis first created a wider entrance to the research by referring to and firmly analyzing more Hitchcock experiences than previous studies. Next, utilizing them, I aimed to conduct a deeper study by treating a number of films and discussing them in relation to each other in multiple ways. The films addressed in this study covered a wide range from the beginning to the end of his career, totaling 28 films. After analyzing a wide range of films simultaneously, I was able to find commonalities and peculiarities among them, and it became possible to deepen my understanding of Hitchcock throughout his entire career, including how his filmmaking techniques developed.

The following is the structure of this study. In the introduction, I described the trend of conventional studies of Hitchcock films and introduced some problems that previous studies have, such as the ones mentioned above. In the first chapter, I referred to several interviews he had given to analyze Hitchcock's own background and experiences. Then I discussed how Hitchcock confronted his own experiences and fears throughout his movies. In Chapter 2, I described the characteristics of the plot structure of Hitchcock films. I revealed how he arranged his stories to

create suspense and put the audience in an uneasy psychological state. Chapter 3 analyzed Hitchcock's camerawork. In this chapter, I discussed how he enhanced suspense in terms of what he shot, how he moved the camera, and how he turned scenes around. Although it was not given a separate chapter due to the word limit, his direction was also discussed at key points in Chapters 1 to 3. In the conclusion, based on the analysis of Chapters 1 through 3, I argued that Hitchcock developed his own cinematic techniques based on his own experiences and sensibilities, and that these techniques are effective in creating tension and stirring the emotions of the viewer. His film compositions, full of elements that deeply appeal to the viewer, would not be possible without his great insight and absolute ability to grasp the emotions of the audience. Therefore, I concluded by saying that his cinematic techniques are always focused on the audience's reaction and on entertaining them.